

相馬市と二宮家の関係

尊徳亡き後、日光仕法を推進したのは尊徳の子^{そんこう}尊行でした。富田高慶をはじめとする相馬中村藩士の協力のもと予定以上の成果を上げました。しかし、慶応4年(明治元年・1872)尊行とその家族(尊徳の妻、尊行の妻、尊行の子)たちは相馬中村藩の要請もあり、戊辰戦争から逃れるために江戸から中村(いまの相馬市中村)に移り住みました。その後、藩主誠胤は石神村(いまの南相馬市原町区石神)に家を新築し住まわせました。また、富田高慶も二宮家のお世話のため二宮宅の東隣に移り住みました。

尊行の子である尊親^{そんしん}は報徳精神を新天地に求め、明治29年、北海道に移住しました。第一歩を踏み出した地が、現在相馬市の姉妹都市となっている大樹町と豊頃町です。

豊頃の開拓事業もひと段落した明治40年、53歳になった尊親たちは再び相馬の地に戻って来ます。大正6年尊親は県立薫陶園(いまの愛育園のある場所)の園長に就任するなど社会事業に尽力しました。尊親の三男と四男(尊徳から見ればひ孫)は相馬中(現相馬高校)の第11回・16回の卒業生です。